

論 文 の 和 文 要 旨

論文題目	高齢者ケアと現代ジャワの家族 —ンガンチャニ（そばに居る）ということの社会的動態—
氏名	合 地 幸 子
本論文の目的は、インドネシア共和国（以後、インドネシア）における、現代を生きるジャワの「家族」によって担われる高齢者ケアのあり方を明らかにすることである。具体的には、ジョグジャカルタ特別州（以後、ジョグジャカルタ）の農村部で暮らす人びと、とりわけ、病いを患う高齢者を事例として、ケアをめぐる人びとの関係性を明らかにする。 ジャワでは、人びとが見舞いを通して病者を社会に受け入れるという慣行がある。後に、人びとは祈りによって死者を神のもとへと送り出す。このように、病いや死は社会全体の関心事であるという背景のもとで、病いと死の間にある療養生活を見ると、従来であれば特定の人がそばに居てケアを行っていた。ところが、近代化およびグローバル化の進行に伴い人びとのライフスタイルは変容し高齢者を取り巻く環境は時代とともに変化してきている。社会が変化する中で高齢者ケアは誰によってどのように担われているのだろうか。 従来の研究では、ケアという行為を前提として、親族の中の誰がケアを担うのか、あるいは、ケアする・されるという医療化された関係を通して、そこに関わる人びとの関係性が分析されてきた。それに対して、本研究は「ンガンチャニ（<i>ngancani</i> (Jv))」（後述）の重要性に着目し、高齢者の置かれている状況を考察した。しかし、本研究はジャワ親族概念の再考やケアの担い手を特定する研究ではない。ンガンチャニ自体は、広義に「寄り添う」という意味をもち、距離あるいは関係性の近さを表す概念であり、ジャワにおいて日常的に見られる行動であるため、本論文ではンガンチャニを「そばに居る」と表記した。 人びとの日常生活においては、その場を共有するということが非常に重要視されていた。「そばに居る」という概念は、ジャワ社会においては高齢者ケアに関わる状況に限定されるものではなく、広く一般的な行為を含んだエミックな概念である。筆者は、この概念に含意される、その場の共有性に着目することで、ジャワ社会における高齢者と家族や社会との関係性をより適切に読み解くことができると考えた。なぜなら、本調査地では、高齢者と家族や社会との関係は、狭義の高齢者ケアに限定されない、広い幅の変化をともなった一連のつながりだからである。したがって、欧米や日本の高齢者ケアを前提に観察をおこなうと、当該社会において高齢者が置かれている真の状況が見えづらくなる。筆者は、ケアのみを切り取ることなく、一連のつながりの中で高齢者の生き方を提示するには、そばに居るという観点からより広い社会文脈の中で人びとの相互関係を見ることが必要不可欠だと考える。 本論文の意義は、現代を生きるジャワの家族を対象として、本調査地の高齢者をめぐる社会全体の見直しを行い、ケアに限らないより広い社会文脈から、高齢者の生き方を再考することである。	

本論文は、第 1 章から第 5 章を本論とし、その前後に序章と終章を配置している。序章では、上記の問題意識を述べた後に先行研究の問題点を検討した。

第 1 章では、調査地の歴史的背景および現在の住民構成を概観し、住民の多数がインフォーマルセクターに従事しており、インドネシアの平均でみても低収入に属する世帯が多く、子供の村外への流出が多いという特徴を示した。

第 2 章では、民主化以降にインドネシア社会に表出する高齢化対策の特徴を明らかにするために、高齢者医療・福祉制度の整備状況および様々な福祉活動を分析した。インドネシアにおける高齢化対策は、国際機関の動向に影響され、また、国際機関の資金援助を受けて、急速な人口高齢化を強調する民主化の流れの中で展開している。その特徴は、世界保健機関（WHO）が提唱した「アクティブ・エイジング」の概念や WHO および国際連合児童基金（UNICEF）が提唱するプライマリー・ヘルス・ケア（PHC）の概念の下、高齢者福祉の実装がコミュニティ・ベースによる福祉活動の中に位置付けられたことである。そして、女性を動員した既存の福祉ネットワークを活用し、住民参加型の高齢者福祉活動を展開した。これこそが、インドネシアにおける高齢化対策の最大の特徴である。

第 2 章の結果を受け、続く第 3 章では、住民参加型高齢者福祉活動（高齢者ポスヤンドゥ）の本調査地における展開状況について、ジョグジャカルタ都市部の事例と比較を交えて考察した。本調査地の農民である高齢者の多くにとり、高齢者ポスヤンドゥ活動は、高齢者であるからこそ支援を受けられる活動として、ひとつのセーフティーネットとして機能していることが明らかとなった。高齢者同士の連帯は強化されている。一方、参加者は主に健康状態の良い農民女性を中心であった。なぜ、参加者は一部の高齢者に偏るのかを探るために、高齢者ポスヤンドゥ活動を実施していない地域を見ることが不可欠であった。高齢者ポスヤンドゥ活動を実施していない地域では、高齢者のそばに寄り添うのは、家族やカデル（ボランティアの女性）、プラワット（地域住民の健康を管理する看護師）であった。また、教会や NGO の活動が実施されていたことから、本章では、女性たちによる既存の福祉ネットワークのみに頼らない宗教活動や NGO 活動が、今後のインドネシアにおける高齢者福祉の一旦を担う可能性があることを指摘した。

第 4 章では、高齢者とりわけ独居高齢者の日常生活に注目し、独居が可能となる要因について検討することを通して、ケアをめぐる人びとの関係性について考察した。調査地の高齢者は家族の繁栄および経済的安定を高齢期の理想像としている。沢山の子供に囲まれて経済的に安定した老後を送っていたのは村に生活の基盤を置いてきた社会階層の高い高齢者であった。一方で、村の人びとと良好な関係性を築きながら、そばに居ることができる多くの「家族」に囲まれて暮らしていた独居高齢女性は、高齢期の理想像に近い生活をおくっていた。他方、住民との不和から、人びとに「ボケ」てしまったとみなされた独居高齢男性は、人びとによって独居が「限界」だと判断された。こうした解決方法が人びとの間では現実的になっている。人びとはケアをめぐる高齢者の子供を近親者だと見なしていた。また、人びとの間では、いずれ高齢者は家庭で「家族」に看取られるという規範が

根強い。しかしながら、本章では「限界」とみなされる時期まで独居高齢者のそばに居て応答する人びとの姿勢こそ、正しく近親者であることを指摘した。

第 5 章では、ジャワに特徴的な見舞いの慣行および健康に対する人びとの意識の高まりを確認した上で、寝たきりの高齢者を事例に病いを患う老親のケアをめぐる現代ジャワの家族の動態を分析した。ジャワでは見舞いを通して病者を社会に受け入れ、そののち療養生活が長期化すると二者関係における友誼を深める目的で病者を訪問する行為が確認された。療養生活では移住した子供たちの健康意識が反映されていた。都市部中間層の健康志向の高まりが、農村部における消費生活において浸透しつつあり、従来の農村部では見られなかった療養生活に必要で便利なモノや保健医療サービスが購入されていた。

また、療養中の高齢者のケアに関して、人びとが近親者と見なしているのは同居家族であった。本事例では、先行研究で指摘されてきたような老親のケアを妻、娘、嫁に規定する強い規範は聞かれず、また、実際に男性も担い手となっていた。一方、移住した子供や近接居住の子供たちは、ジャワにおける老親扶養の規範を前景化し、老親のケアは一義的に同居血縁家族であるとした。こうした葛藤や交渉を踏まえて、現代ジャワの「家族」は、そばに居る人によって、責任や義務とみなされる老親のケアをどうにか乗り切っていくことを明らかにした。

終章では、結論および今後の課題に言及した。本論文において、そばに居るという観点から論じることによって、そばに居るという行為は、そばに居る人が存在すると同時にそこに対象が存在するという意味において、二者以上で育まれる相互行為であること、および、相手に応答する姿勢をもってそばに居るという状況が高齢者ケアに関わる重要な要素であり、ある条件の下ではケア実践へとつながる可能性をもつ行動であることが明らかとなった。

本論文の結論は、第一に、インドネシアにおける高齢者ケアは社会全体で担おうとする方向に向かっている。そして、現代を生きるジャワの「家族」を通して描写してきた高齢者ケアのあり方は、人びとから近親者であるとみなされている同居家族を中心として、応答する姿勢をもった人びとがそばに居ることで成り立っている。本調査地のような農村部インフォーマルセクターに従事する高齢者、とりわけ重度の病いを患う高齢者とその家族は、現在そばに居るという相互関係を通して、どのようにその社会に見合ったケアを実現できるのかという問題に直面している。

第二に、ケアをめぐる人びとの関係性は、これまでの社会関係と切り離せるものではない。人類学では、東南アジアにおける双方向的な社会を事例として、人びとの関係性の広がり明らかにされてきた [坪内・前田 1977; Carsten 1997]。また、その関係性は段階的に生じ、人生を通じて変化する [Carsten 1995: 236]。従来から流動的に疑似家族を形成するというような特徴を持っているジャワの人びとの間で、高齢者ケアをめぐる人びとの関係性は、社会変化によってのみ影響を受けているのではなく、柔軟に変化するという融通性を持ち合わせた中で形作られている。それは、そばに居るということを重要視する人び

との間に見出された。

今後の課題は、高齢ケアに ICTs の利用が及ぼす影響および児童と高齢者ケアの関係性に注目することである。児童は、農村部において高齢者のそばに居ることができる大切な存在である。今後も現代ジャワの家族と高齢者ケアの関係性を明確にする研究にさらに取り組んでいきたい。